



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第26号

◆巻頭言

明治大学文学部教授 佐々木 憲一

この日本古代学教育研究センター発足以来の柱は学際性と国際性である。そしてこの両者は相互に深く関係しあっている。この柱を維持し、さらに強固にするために、このニューズレターに収録しているような色々な教育・研究活動を毎年行っている。多くの人から奇異に見られるのは、多大な文化的影響を日本に与えてきた中国・韓国との学術交流は当然としても、なぜアメリカ合衆国、当センターの場合はカリフォルニア州ロサンゼルス所在の名門私立大学である南カリフォルニア大学なのか、という点であろう。

色々理由があるが、北アメリカの大学における日本研究は極めて学際的であるため、北アメリカの研究者と交流することが学際性に直結することが大きな理由である。これは、特にアメリカ合衆国の歴史学者が、日本を含めた東アジアの歴史を「歴史」と認めず、ハーヴァード大学も含め多くの有名大学が日本史・中国史・韓国史の研究者を史学科ではなく東アジア言語・文化学科に配置しているという現実の裏返しかもしれない。つまり、東アジア言語・文化学科では、歴史学者や文学者ら日本では別学科に所属する教員たちが同一学科で恒常的に研究交流を行っているのである。

またアメリカ合衆国の日本研究者たちが自然と学際的になる背景として、彼らが「理論・理屈」を好む傾向があることを指摘したい。理論的枠組みは文化人類

学や社会学など隣接諸分野から借用することが多いので、その理論的枠組みの応用が適切かどうかは別として、学際研究の実践であることは変わらない。というわけで、アメリカ合衆国だけでなく、協定を結んでいないカナダの大学とも学術交流を実施することは、我々にとって学ぶことが多いのである。

この国際性に関連して、非常に幸運にも2020年1～3月にカリフォルニア大学ロサンゼルス校の客員教授を務める機会に恵まれた。日本考古学、特に古墳時代考古学をテーマに週2回、75分の授業を10週間（厳密には1週間帰国しており9週間）行った。これは、外国人学生との思考回路の違いに大きく考えさせられる機会となった。当方も難しい内容の話をするので質問をするように促したので、毎回多数の質問を受けた。それに逐一答えていたため、授業がなかなか進まなかった。特に古墳時代前期の歴史を理解してもらうために、講義が6回になったのは正直参ってしまった。おかげで、授業は古墳時代中期、5世紀末までで終わってしまった。

一番困ったのは、古墳時代前期の地域的差異を強調しようとして目論んで、九州から東北にかけて各地の古墳文化を紹介したところ、まったく理解されなかったことである。授業のない土曜日、日曜日に丸2日考えて、まず中央の王権が地方に期待したことを仮説的にリストアップし、各地でそのリストのどれが受容され、どれが受容されなかったか、という内容に講義し直して、多くの学生に理解してもらったようである。この内容を50分に圧縮して、南カリフォルニア大学で講演したところ、私の意図するところは伝わったようである。つまり、前方後円墳の全土的な分布のみが外国では（日本でもそうであるが）強調されるので、そういった地域的差異は皆、「思いもよらなかった」との反応であった。

海外との学術交流の素晴らしさは、こういった自分で知っていることも、改めて見直す機会も提供してくれるのである。予算が続く限り、北アメリカの研究機関との交流は続けたいものである。

目次：

| | |
|----------------------------|----|
| 南京大学大学院生との交流会 | 2 |
| フィールドワーク | |
| 高麗大学校プログラム | 3 |
| 中国プログラム | 5 |
| USCプログラム | 7 |
| 南西日本プログラム | 9 |
| 高麗大学校との国際学術交流会 | 11 |
| 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学との交流会 | 12 |

◆南京大学大学院生との学術交流会

実施日：2019年7月5日(金)

実施場所：明治大学

南京大学大学院の大学院生が本学を訪問して両大学の院生・教員との学術交流を行う取組みが、2019年7月5日(金)の4・5限に開催された。毎年この時期に開催しており、今年で4年目となる。今年は4名が来校し、次のように美術・宗教考古学と瓦研究を専門とする3名の研究発表が行われた。

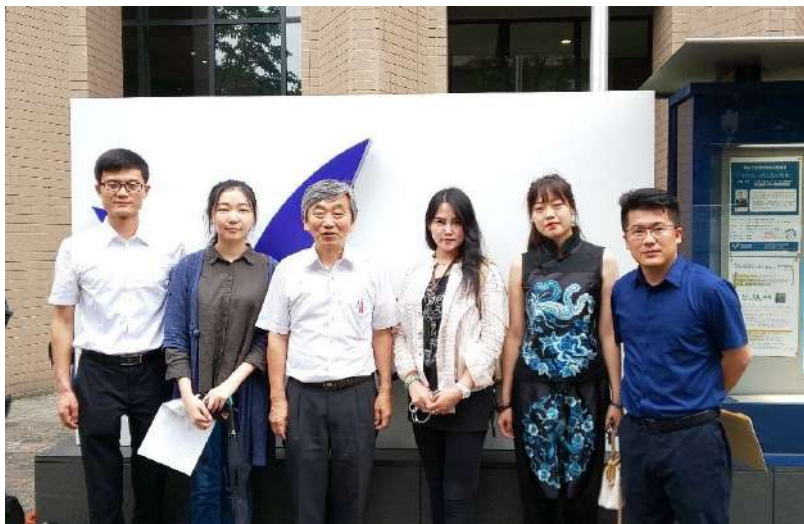
- ・劉小旦 Liu Xiaodan 「中国芸術における獅子の形象—外来芸術様式との比較研究—」
- ・趙識 Zhao Shi 「美学的視閥（視野）における狐仙イメージの分析」
- ・張效儒 Zhang Xiaoru 「渤海国文字瓦研究の回顧といくつかの問題の再認識」

劉氏は、ユーラシア世界の獅子像には5種があり、中国ではそのうちギリシア・メソポタミアの2種と関連するが、戦国代の「狻猊」に始まり、漢代の獅子像でインド系の要素が加わった定式が、清代の標準化を経て現在に至る過程を提示した。私も博士課程時代にユーラシア考古学を多少齧った経験があるが、その雄大な世界の魅力を改めて感じる事ができた。趙氏の報告も、後漢代から清代までの狐にかかわる信仰の変遷を、考古学的図像と文献史料をもとに描き出す壮大な構想での研究である。しかし、より焦点を絞り、実物資料に即した分析を進めることで研究の個性化を図る必要があると感じた。趙氏は社会人として活躍しながら大学院で考古・文物研究を進めている点でも、とてもよい刺戟を受けた。張氏は昨年に続いて2年連続

の研究発表である。昨年は、秦漢～北朝代の都城の瓦研究を採り上げたが、今回は、自ら文字を持たない渤海国における文字瓦研究について研究史の整理と今後の研究方法の整理を行った。張氏の瓦研究は、日本の奈良文化財研究所の瓦研究の方法論を採用しており、詳細な資料研究と精緻な方法論を駆使する特色がある。中国における次世代の瓦研究の牽引者になるであろうと期待させる充実した研究発表であった。



今回も、明治大学日本古代学研究所の石黒ひさ子氏に通訳をお願いしたが、明大考古学専攻4年生の関イショさんも参加して交流のサポートを担当した。一行は、明治大学での研究交流だけでなく、その後、奈良文化財研究所をはじめ奈良の史跡・博物館・資料見学も行って自己研鑽の機会とした。11月に私どもが南京大学を訪問した際には歓待を受けた。（石川日出志）



◆フィールドワーク ◇高麗大学校プログラム

実施日：2019年9月5日(木)～8日(日) 3泊4日

参加人数：学生4名 引率者3名 計7名

実施場所：韓国（ソウル）

<フィールド調査行程>

9月5日：羽田空港発・ソウル空港着 博物館等見学

9月6日：高麗大学校民族文化研究院で学術交流行事

9月7日：韓国学中央研究院訪問、韓国近代文学館・仁川開港博物館見学

9月8日：国立中央博物館見学 ソウル空港発・羽田空港着

9月5日～8日の4日間の日程で高麗大学校文科大学大学院との研究教育交流プログラムを実施した。教員3名、大学院博士前期課程院生2名、博士後期課程院生2名の合計7名が参加した。

5日は生憎の雨天であったが、ソウル到着後、市内の博物館等を訪問した。大韓民国歴史博物館は展示替えにより閉室中であったが、三・一独立運動についての特別展は入ることができた。三・一運動に関わる多数の資料が展示されていた。無名の人々のさまざまな遺品（手記や卒業証書など）が印象的であった。景福宮を見学後、国立古宮博物館を見学した。朝鮮王朝の東宮の学問所の日録である「春坊日記」に興味をひかれた。「春鶯囀」などの舞楽について、映像を駆使して立体的に再現してあったのは華やかであった。

6日は高麗大学校民族文化研究院で学術交流行事を実施した。明治大と高麗大の教員5名と大学院生13名が研究発表を行った。古代から近現代に至る日韓の文学・史学の諸問題について、さまざまな話題が出た。明治大からの参加院生は近現代を専門としていたが、「創氏改名」の強制をめぐる状況についての詳細な調査報告もあり、討論では率直な意見が飛び交った。すべての発表の後、参加教員による総合論評があった。発表論文については予稿集を作成した。資料に残らない声や、政治や外交の論理では処理しきれない感情を掬いとりようとする発表が目立ったように思う。日韓関係が悪化する中、「文学」の意義をあらためて考えさせられた。

7日は貸し切りバスで高麗大の教員・院生と合同のフィールドワークを実施した。午前中は韓国学中央研究院を訪問した。安東の独立運動に関する展示を見

た後、蔵書閣で文献資料の保管・修復作業の現場を見学した。ちょうど高麗大のチームが取り組んでいる研究に関する資料が大量に寄贈されたところで、それらの全貌を見ながら、実物を手にとって、個々の資料の意義と研究の見通しを聞くことができた。午後は台風が接近する中、仁川に移動して韓国近代文学館と仁川開港博物館を見学した。毎回交流でお世話になっている高麗大の沈慶昊教授は漢文学が専門であるが、近現代の小説・詩人にも造詣が深く、多くの展示について興味深い解説を聞くことができた。韓国近代文学館の咸苔英氏のお話をうかがうこともできた。

8日は国立中央博物館を見学した。景観をテーマにした特別展が開催中で、朝鮮時代の心落ち着く絵画を多数見ることができた。夕方までに空港に向かい、台風の接近により欠航になる直前、かろうじて羽田に戻った。4日間という短いプログラムであったが、内容の濃い見学と研究発表会を行うことができた。参加院生は皆喜んでいて。
(牧野淳司)



2019年度 高麗大学校・明治大学 学術交流行事

2019年9月6日（金） 教員講演及び研究発表・研究構想発表

| | | |
|-------|---|--|
| 9:30 | 開会式 | |
| | 開会の辞: 沈慶昊(高麗大 漢字漢文研究所 所長) 歓迎の辞: 李亨大(高麗大 文科大学長) | |
| 10:00 | 教員講演 司会: 魯耀翰(高麗大) | |
| | 鄭雨峰(高麗大 国文学科) ●東郭李遷の生涯と日本理解 | 竹内栄美子(明治大 文学部) ●戦後文学者はアジアをどう認識したか —『中野重治・堀田善衛往復書簡 1953-1979』から |
| | 牧野淳司(明治大 文学部) ●仏教を流伝することと戒律を守ること | 楊沅錫(高麗大 漢文学科) ●漢字字源学及び中国神話人物の理解 |
| | 李相雨(高麗大 国文学科) ●3.1運動前夜の東京留学生と近代劇 —李光洙と崔承萬の境遇を中心として— | |
| 13:00 | 博士課程 研究発表 司会: 魯耀翰(高麗大) ※発表15分・討論5分 | |
| | 金紀燁(高麗大) ●18世紀の朝鮮・日本で編纂された李滄の書簡選集についての書誌的考察—「退溪先生書節要」と「李退溪書抄」を中心に— | 宮崎智武(明治大) ●創氏改名の強制と民衆の届出 —京城を例に— |
| | 陳逸鳴(明治大) ●川端康成「ゆくひと」における物語空間 —世界は愛の喪失と響き合う— | 朴焯映(高麗大) ●選ばれた手記、要請された映画 —「母」「拳を握る少女たち」「女性記者20年」を中心に— |
| | 李昌熙(高麗大) ●リチャード・ラット(Richard Rutt)の『九雲夢』英譯本に関する考察 | |
| 15:00 | 碩士課程 研究構想発表 司会: 沈揆植(高麗大) ※報告15分・討論5分 | |
| | 朴柱炫(高麗大) ●韓国・日本・ベトナムにおける文明開化論叙述の特徴 —「西遊見分」「文明論之概略」「文明新学策」を中心に— | ロゼ(De Iudicibus Rosanna)(高麗大) ●裴瑛亞(ペ・スア)の小説に現れるグロテスクの様相 —『赤い手クラブ』と『日曜日すき焼き食堂』を中心に— |
| | 高松靖美(明治大) ●宮沢賢治童話に見る理想世界 | 全商輝(高麗大) ●筆記の観点から見た安錫傲『響橋漫録』の研究 |
| | 呉炫知(高麗大) ●女性作家のアイデンティティ —1930年代の李善熙を中心に— | 南潤芝(高麗大) ●金春澤「北見雜説」の資料価値と訳注方法 |
| | 乗木大朗(明治大) ●堀辰雄と昭和十年代 —「芸術派抵抗」をめぐって— | 李侏奐(高麗大) ●中韓の再生叙事の様相とその意味 —人物蘇生譚を中心に— |
| 17:15 | 総合論評 | |
| | 牧野淳司(明治大)・竹内栄美子(明治大)・李相雨(高麗大)・楊沅錫(高麗大) | |
| 17:45 | 閉会式 | |
| | 閉会の辞: 尹在敏(高麗大)・牧野淳司(明治大) | |

◇中国プログラム

実施日：2019年11月3日(祝)～7日(木) 4泊5日

参加人数：学生2名 引率者3名 計5名

実施場所：中国(南京・上海)

<フィールド調査行程>

11月3日：成田空港発 - 南京空港着 南京大学ホテルにて歓迎夕食会

11月4日：南京市内発掘現場2件・初寧陵石刻見学 南京大学にて学術交流会

11月5日：南京博物院・六朝博物館・南京大虐殺記念館 燕子磯公園にて長江を見学

11月6日：上坊孫呉墓見学 南京から上海に移動 上海歴史博物館を見学

11月7日：上海博物館を見学 上海空港発 - 羽田空港着。

◇参加記

博士前期課程3年 箕浦 絢

大学祭期間の2019年11月3日(日)から7日(木)までの4泊5日で、中国南京・上海プログラムが実施された。主目的は南京大学との古代史・考古学の学術交流会であり、それに前後して南京近郊および上海の博物館や遺跡の見学を行った。以下、日ごとに行程をおっていき、印象的な出来事を述べていく。

3日：成田空港から南京禄口空港へ。夜到着し、宿舎となる南京大学ホテルにて、南京大学の方々が歓迎会を開いてくださり、本場の中華料理を堪能した。

4日：午前中は南京市内の発掘現場を2件と初寧陵石刻を見学した。発掘現場は未発表のため詳細は伏せるが、日本との土質や発掘方法の違いを学ぶことができた。また初寧陵石刻は所謂「辟邪」であり、酸性雨で少しとかされているものの、約2mほどの2対の石像が南京市郊外の道路脇に展示されていた。

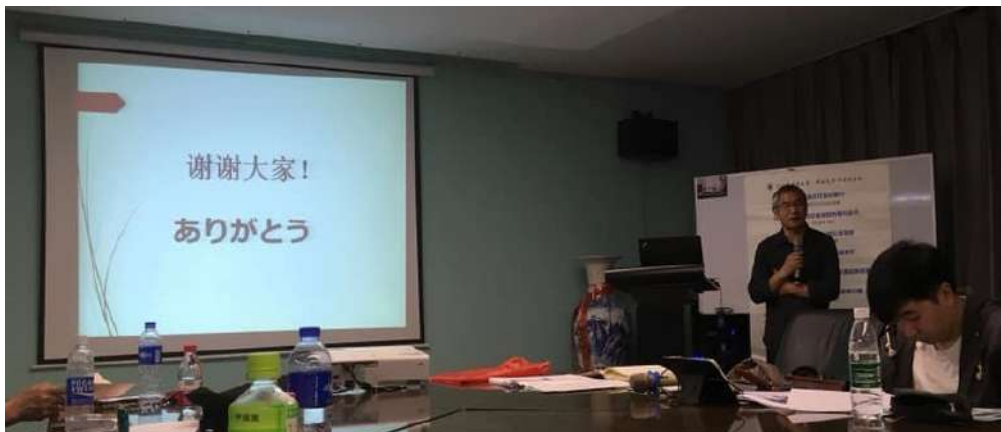
午後は南京大学にて学術交流会。石川日出志先生・若狭徹先生(本学)のご講演と、南京大学の博士課程生2名、本学の博士課程生1名・修士課程生1名の研究発表を行った。南京大学の学生だけでなく様々な立場の



方が聴きにきてくださり、主催の賀雲翱先生(南京大学)進行のもと質疑応答では会場全体での活発な議論も行われた。

5日：南京博物院、六朝博物館、南京大虐殺記念館を見学。南京博物院や六朝博物館では弩機や銅鏃を見学し、日本の弓矢との違いを学んだ。南京大虐殺記念館は日本と中国との戦争史をテーマにした博物館である

が、事前に見学の連絡をしたところ、日本の民間団体が見学することを喜んでくださった担当の方が館の沿革などを真摯に説明して下さった。夕方には燕子磯公園にて日の沈みゆく長江を臨み、古代の人々の航路や日中交流について考察した。



6日：午前中は博物館建設中の上坊孫呉墓を見学。レンガ積み石室や棺座の動物装飾は、壮大で精緻であり圧倒された。午後は高速鉄道にて上海に移動し、上海歴史博物館を見学。伝統的な建造物の中に並ぶ古代の土器や、近現代の民具を見学した。その後夕方からは南京路歩行街を踏査し、上海の夜景と黄浦江を臨みながら、文化の変遷や交流について考察した。

7日：午前中は上海博物院を見学。青銅器や玉器、印など4階までテーマごとの展示室があり、いずれの展示室も良品が並べられていた。特に青銅器展示室では各時代の様々な食器や酒器が並べられ、日本との品質や規模の違いを学ぶことができた。その間石川先生は陳傑副館長と会談し、印の調査を行われていた。午後には上海浦東空港へ向かい、東京羽田空港へと帰還した。

このプログラムは考古学・古代史の院生のプログラムですが、このように他国での実地調査と、他国の

学生方との交流、また発表の機会は貴重な経験であり、とても学びや発見の多い5日間となった。筆者の研究発表に対しては南京大学の学生の方からの質問を皮切りに会場全体で活発な議論が行われ、日本と中国の弓矢文化の違いを実感し、研究へのとても良い刺激となった。また翌日の南京博物院では発表を聴きに来てくれた方がたまたまボランティアで居たため声をかけてくださり、銅鏃のところまで案内し説明してくれるなど、非常に色濃い交流ができたと思う。

筆者は初めての中国上陸であったが、研究分野だけでなく、日本と中国との食文化の違いや風土の違いなども学び、実感することができ、日本のことを考えるためには他国との違いや交流を考えていかなければならないことを痛感したプログラムであった。

末筆ではありますが、この度このような機会を与えてくださった先生方、関係者の方々に心より感謝を申し上げます。



南京大学歴史学院前にて

◇USCプログラム

実施日：2019年10月31日（木）～11月4日（月）4泊5日

参加者：引率教員3名、院生3名 計6名

実施場所：アメリカ合衆国（カリフォルニア）

〈フィールドワーク概要〉

10月31日：日本時間の11月1日0時過ぎに羽田空港発 現地時間の10月31日18時頃にロサンゼルス国際空港着

11月1日・2日：USCにおいて学术交流

11月3日：ロサンゼルス現代美術館、全米日系人博物館等見学

11月4日：現地時間の11月4日10時過ぎにロサンゼルス国際空港発 日本時間の11月5日15時過ぎに成田空港着

◇参加記

博士後期課程3年 三浦 直人

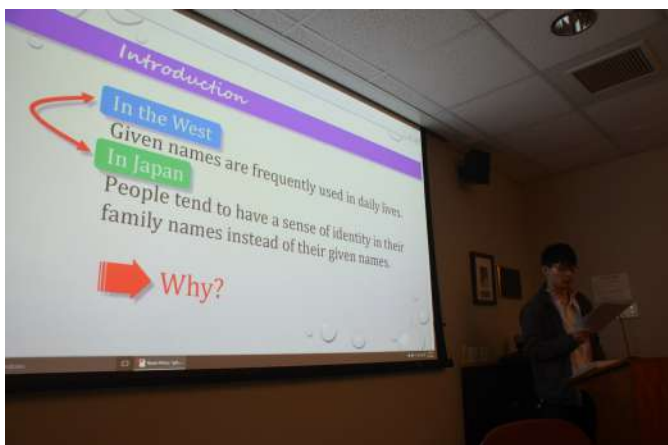
今年度のUSCプログラムは、現地時間の10月31日から11月4日にかけて実施された。11月1日の0時過ぎに羽田を出発、10月31日の18時頃、ロサンゼルスに到着し、帰りは同地を4日10時過ぎに出発、5日の15時過ぎに成田へ到着した。参加者は、佐々木憲一先生（考古学）、牧野淳司先生（日本文学）、落合弘樹先生（日本史学）、桜田真理絵さん（日本史学）、木村愛美さん（日本文学）、そして筆者（日本史学）の6名である。

USCとの学术交流は、2日間（1日・2日）に亘って行われた。「英語／日本語」、「読む／書く／話す／聞く」、参加者それぞれの操る言語とその方法が、決して一律ではない中で、「声／文字／図像」といった様々なツールを通して、自らの研究を伝え、あるいは、他者の研究を理解しようと努める、濃密な空間であった。現地側からは、「六条殿所領（公事注文）目録」の史料論的検討や、「台記」の翻訳過程とその活用方法を議論した報告、記憶というアプローチから巖島神社を扱った報告、中世の「被差別民」に着目した報告、征服王朝の文人を対象とした報告、中国史



における法とジェンダーに焦点を当てた研究紹介、院政期の造寺造仏における数量的功德主義の発想をテーマとした報告があった。明大からの発表を含め、それぞれの論点が有機的に結び付いていくさまは、史学や文学といった枠組みではなく、日本や東アジアといった枠組みを共通の土台とする、USCならではの展開だと感じた。

筆者の報告は、世界的にはギブンネームを呼び合う地域が多い中で、なぜ日本においては、ファミリーネームによって自他を名指すのか、という問題を、明治期に遡って考えるものであった。USCのジョーン・ピジョー先生からは、氏・姓・苗字といった概念を、英語ではそれぞれどのように表現するのか、というご質問をいただいた。筆者自身、発表資料の作成に際して大いに悩み、最終的にはローマ字表記を採用した経緯もあり、十分に回答しえなかったが、「英語ではどう表現するのか」という問いを、思考や叙述の精度を高めるための1つのチェックポイントとして獲得しえたことは、大きな成果であった。それと同時に、もし今後、またこの場で研究報告をさせていただく機会が



あるならば、その際は、英語での口頭報告に挑戦することで、言語・概念のずれと正面から向き合いたいと感じた。

報告内容に関連して、人名の呼び方をめぐり、現地でのエピソードにも言及しておきたい。筆者の研究報告後、筆者に対する呼称を即座に、「三浦君」から「直人君」へと変えて下さった佐々木先生のユーモアには、思わず笑ってしまったが、後日、学术交流に参加していたUCLAの日本人院生に、USCの日本人院生のファミリーネームを尋ねたところ、普段ギブンネームでしか呼ばないため、すぐには思い付かない、とのことであった。また、コーヒーショップ等の注文では、店員からギブンネームを訊かれ、商品が出来上がると、番号ではなくギブンネームで呼び出された。「Nao」の呼び名が印字されたレシートは、良い記念品である。

3日は、ロサンゼルス現代美術館・全米日系人博物館を見学した。前者では、監視スタッフが、思い思いの活動をしながら職務に当たっているなど、日本とは異なる、開かれた美術館の在り方を目の当たりにした。後者では、日本語による展示解説もあり、日系人部隊の抱えたジレンマや、戦時の強制収容と戦後の国家賠償請求などについて、考えを深めることが出来た。展示の冒頭に掲げられた、「コミュニティとはなにか？」という問いかけが、重く



日系人部隊のモニュメント(全米日系人博物館にて)

のしかかってくるのを感じた。

帰国から数ヶ月を経た現在も、USCで報告した院生3人に、現地で合流した明大文学部卒の山下太郎さんを加えたメンバーで、分野横断型のささやかな勉強会を続けている。USCプログラムを通じて、タコツボ的・一国的な関心を乗り越える必要性を、十二分に実感することが出来た。関係各位に改めて感謝申し上げたい。

最後となるが、現在、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、世界各地で「鎖国」状態が続いている。一刻も早く流行が終息し、各国・各地域間の積極的な交流が再開することを、願ってやまない。



USCプログラム発表者、参加者 (ジョン・ピジョー日本古代史教授のご自宅にて)

◇南西日本プログラム

実施日：2019年12月10日(火)～12日(木) 2泊3日

参加人数：学生7名 引率者2名 計9名

実施場所：福岡県

<フィールド調査行程>

12月10日：羽田空港発 - 福岡空港着、西新町遺跡、福岡市立博物館、元寇防塁跡、金龍寺(貝原益軒墓所)、浄満寺(亀井南冥墓所)、善龍寺(亀井南冥額)、甘棠館跡(福岡藩校跡)、福岡城・鴻臚館跡(鴻臚館跡展示室)、福岡アジア美術館、福岡市埋蔵文化財センター月隈収蔵庫、福岡市内泊

12月11日：水城跡(水城館)、太宰府天満宮、九州国立博物館、基肆城水門跡、大宰府政庁跡(大宰府展示館・蔵司地区発掘調査現場)、筑前国分寺跡、筑前国分尼寺跡、大野城(大宰府口城門跡・百間石垣)、福岡市内泊

12月12日：女山神籠石・長谷水門・横尾谷水門、岩戸山古墳(岩戸山歴史文化交流館いわいの郷)、高良大社、高良山神籠石・馬蹄石・水門、平塚川添遺跡、金隈遺跡(金隈遺跡甕棺展示館)、福岡空港発 - 羽田空港着

◇参加記

博士前期課程1年 柏瀬 拓巳

去る2019年12月の10日(火)から12日(木)までの3日間、福岡県域をフィールドとして南西日本プログラムが実施された。福岡県域でも対象としたのは福岡平野から筑後平野西部にかけてであり、概ね博多周辺から筑後平野へと南下していく行程を取った。以下、今回の主なフィールドワークの対象について時期別に述べる。

弥生時代の遺跡としては西新町遺跡、平塚川添遺跡、金隈遺跡を訪問した。西新町遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡、平塚川添遺跡は同じく弥生時代後期から古墳時代前期にかけての環濠集落、金隈遺跡は中期中頃から後期前半にかけての甕棺墓群である。中でも西新町遺跡は博多湾に面した砂丘上に営まれた遺跡であり、福岡市立博物館に展示され

た大陸・半島系の土器からはその交流の場としてのあり方が読み取れる。



基肆城水門跡



筑前国分寺塔跡

古墳時代の遺跡では上記の2遺跡の他に八女市岩戸山古墳を訪れた。岩戸山古墳は「筑紫国造乱」の磐井の奥津城と考えられている古墳として知られ、この地域に特有の石人石馬を配置していることでも有名である。また、資料もさることながら、2015年に本古墳の展示博物館としてリニューアルオープンした「いわいの郷」における磐井の姿は地域の盟主としてヤマト王権に立ち向かった人物として描かれ、さながら「郷土の偉人」の扱いを受けていることもまた興味深く感じられた。

続く古代の遺跡として各山城・神籠石や水城、大宰府、国分僧寺尼寺などを訪ね、今回の巡見ではこの時期の遺跡・史跡を最も多く踏査した。その中でも水城や山城は663年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫した朝廷が防衛のために築いたとされる施設群であり、大野城の百間石垣に代表される大規模な石垣や、戦略的な山城・水城の立地からは当時の危機感を感じ取ることができる。



大野城百間石垣

このほか、中世の史跡として元寇防塁、近世のものとして貝原益軒・亀井南冥墓所を訪ね、現代を取り扱った福岡アジア美術館も訪問した。

このように南西日本プログラムにおいては、弥生時代から古代、そして現代までの九州北部の遺跡、その他の施設を巡ることができた。それらの多くに共通して言えることとしては、福岡という最も朝鮮半島に近いという大陸・半島との地理的なパイプが存在した地域だからこそ築かれ、営まれたということだと考える。それは必ずしも地域にとって恩恵の歴史だけではなく、日本列島の外交史の中で福岡が果たして来た役割はやはり非常に大きい。今日では空路の発達により都内からでも容易にアジア諸国に行けるようになった。それでもなお、「アジアへの玄関口」という自負が現代でも根強く残っているのかもしれないと感じられた3日間であった。

今回このような貴重な機会を与えてくださった先生方、また今回の我々の訪問に際し格別のご配慮をいただきました現地の皆様方に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。



太宰府政庁跡にて

◆高麗大学校との国際学術交会議

実施日：2019年11月16日（土）

実施場所：明治大学駿河台校舎 リバティータワー11階

◇A会場参加記

立教大学日本学研究所研究員 朴 知恵

去る2019年11月16日、第10回 明治大学・高麗大学校 国際学術会議が「日韓の文学・史学研究の諸問題」というテーマのもと開催された。午前中は高麗大学校、明治大学の先生方による基調講演や企画主題発表があった。紙幅の都合上、一部のみの紹介となるが、基調講演では、たとえば鄭雨峰（高麗大学校・国語国文学科）先生による1763年に書かれた下級武官の紀行文の紹介があった。高級官僚とは異なり、朝鮮的漢文や朝鮮語の当て字などを用いて、日本での経験をより生々しく表現したことを知り、大変興味深く思った。



また、崔貴黙（高麗大学校・国語国文学科）先生は神の描き方に注目し、朝鮮の説話文学という立場から日本の説話文学との比較を試みており、国際会議における研究方法などを考えさせられた。

午後には大学院生9人による研究発表があった。今回の発表者は、韓国や日本はもちろん、中国、ウズベキスタン、イタリア出身の学生たちで多岐にわたる分野の研究発表となった。発表者の研究対象の時代は上代から現代まで、古典文学、説話文学、在日文学、パンソリ文学、イタリアの大学における日本文学の研究動向など、時代やジャンルを乗り越えた刺激的な内容がそろっていた。もちろん、国、ジャンル、研究対象が異なるため、深い論議への発展という面では難しかったところも見られたが、質疑応答を通して他分野の専攻者に自分の研究を少しでも理解してもらおうと試みることにより、聴衆だけではなく発表者にとっても改めて自身の専攻を整理できる有意義な時間となった。大学院を出た今、改めてこういった経験が貴重であることを実感しており、このような機会を与えてくださった先生方には感謝したい。

◇B会場参加記

博士前期課程1年 才木 希

11月16日(土)、明治大学リバティータワー11階において、「第10回明治大学・高麗大学校 国際学術会議 日韓の文学・史学研究の諸問題」を開催した。

9時45分に開会式があり、その後10時よりA組（文学）とB組（歴史学）に分かれて研究報告を行なった。まず、午前中は基調講演及び企画主題発表として、明治大学及び高麗大学校の諸先生方が報告を行なった。その後昼休憩をはさみ、17時まで学生が報告を行なった。形式としては、基本は明治大学と高麗大学校の学生で2人1組となり、1組約1時間で互いに報告・質疑を行なった。これは高麗大学校の学生と交流するきっかけともなった。



筆者はB組の報告者の1人として参加したため、以下はその視点で記したい。B組は明治大学2名・高麗大学3名・北京大学歴史学部大学院1名・中国社会科学院大学院1名の計7名の学生が参加した。報告内容の時代は8世紀から20世紀とかなり幅があった。加えて、外国の事柄ということもあり、筆者自身理解の難しい部分も多少あった。だが逆に言えば、全ての報告内容が新鮮であり、本学術会議に参加しなければ知りえないようなことばかりであった。

筆者は「8世紀における官物管理と神火」と題して報告を行なった。内容は日本の地方に留め置かれた租等の稲の貯蔵施設である正倉の管理に関するものである。韓国や中国と関連の薄いものであったが、多くの質問を頂戴した。質問は本論に直接かかわるものから、地方財政全体に関わるものまで多岐にわたった。中には答えに詰まることもあり、勉強不足を再認識する場ともなった。

また、言葉の壁があり、日本の学説等の知識を共有していない人を相手に説明することの難しさを実感した。図などを用いてわかりやすく説明する。そのことの大切さを知ることが出来たのも、本会議に参加した利点であると考えられる。

加えて、筆者がペアとなったのも、筆者と同様に財政に関わるものであった。時代こそ18世紀と、離れていたが、学ぶところも多かった。

以上、本会議を通じて他国の先生方・学生との交流により、筆者は多くの経験・知見を得ることが出来た。こうした国境を越えた学術交流は、両校の研究者・学生が研究の幅を持たせるためにも、今後とも続けていくべきであろう。

本会議の開催にご尽力された方々、ないし報告者の方々に感謝の意を表しつつ、雑駁な参加記を終わりたい。



◆大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム

実施日：2020年1月11日～12日

実施場所：大阪大学豊中キャンパス

◇参加記

博士前期課程1年 鎌塚 大地

「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」の一環として、今年度の「4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」は1月11日～12日に、豊中キャンパス大阪大学にて行われた。この2日間で明治大学・大阪大学・京都府立大学・関西大学の4校合わせて10名の大学院生が交流発表を行い、私

たち明治大学からは考古学2名、古代史3名、教員2名が参加した。

交流会では11日に考古学、翌12日に古代史の研究発表を行った。初日である11日には4大学合わせて6名が報告し、弥生時代から中世初期までの幅広い範囲についての報告と討論を行った。近しい時代を研

究するとはいえ、古代史と考古学という2つの分野は主に取り扱う史料が「文字史料」・「出土史料」とそれぞれ異なっており、またこれらの性質が違っているため、古代史を専攻する私にとって考古学はあまり馴染みのないものではあった。しかしながら、普段は聞くことがあまりないような知識を得ることができ、これまで積極的に検討する機会を得られなかった分野について学ぶことができたと考えている。

翌12日には合計4名が報告したが、今回の研究発表では、古代史では8世紀における東国での神火事件や、武蔵国の大贄などといった東国に関連がある研究が多いように思われ、私自身も「平安初期の親王経済」をテーマに東国に関連する研究を発表させていただいた。本発表では、古代の財政史において重要な位置にあると思われる親王を始めとした皇親経済の中で、親王を常陸・上総・上野の国司に任官させるといった親王任国を中心に検討し、実際に親王たちが受け取っていたと思われる収入の額を予想して算出することで、本制度の目的と意義を明らかにすることを試みようとした。私自身にとって本プログラムは初参加であり、また明治以外の大学での発表も初めての経験であったため、今回の研究発表は不安や緊張が伴うものであったが、発表後に設けられた質疑応答の時間には様々な大学の方々から様々なご指摘やご教授をいただき、自分の研究にとって非常に有意義な時間をいただけた。

本プログラムの特徴として、自分の所属する大学とは地域的に離れた他大学の研究者との学術的な交流ができるという点があげられる。また、分野の異なる古代史・考古学間での交流という点で非常に刺激的な場であった。同じ大学間であったとしても専攻が異なる分野であれば討論の機会は少なく、ましてや他大学の

他分野間との交流の機会を得ること自体めずらしいように思える。そのため、本プログラムでの経験を通して他大学・他分野との交流の重要性を再確認できた。これからの歴史学において、従来のように片方をみを重点的に扱うのでは研究の発展に限界があると考えられるだろう。そういった意味では古代史および考古学間の知識を共有する場を設けることは、これからの歴史研究の発展に必要不可欠であろう。他分野との意見交換は普段触れる機会に乏しい研究への好奇心を満たしてくれるだけの場ではなく、新鮮かつ幅広い知識を得ることによって、自分自身の研究を発展させていくことができる非常に重要かつ貴重な機会であったと私は思っている。



最期に、本プログラムに参加することで私自身の研究を再検討するだけでなく、古代における幅広い分野について知見を深める機会、および他大学・他分野の研究者様方との交流の場を設けていただけたことについて感謝の意を述べつつ、参加記を終わらせたいと思う。